

# 商工業の始まり

## (相馬商店の創業について)

新得町郷土研究会 相馬邦章

明治三十二年(一八九九)に開拓第一陣、十三戸がシントク原野に入地し、新得の開拓が始まりました。

また明治四十年(一九〇七)に鉄道が開通し、九月八日に新得駅が開業しました。

そんな明治の開拓の時代に、相馬商店が創業しました。しかし創業年が資料により異なっております。しかし創業

手元にある資料から、書き出してみました。

### 資料その① 新得町商工会史(平成十三年十月 発行)

#### 第一章 商工業の発祥(P3)

明治三十二年(一八九九)四月、シントク原野の開拓が始まった頃は自給自足の生活すら厳しく、この地で生活必需品を買い求めるなど到底できることではなかった。どうしても必要なときは、二日ばかりで帯広や落合までいかなければならなかった。

同三十二年八月、日高山脈越えで開通した石狩道路沿いに官立の「新得駅通所」が設けられたが、ここは山越えで往来する旅人の宿泊や、郵便物の継ぎ立てが業務とあって商品の販売等の商業は営まれていなかった。

翌三十三年(一九〇〇)には、約一〇〇名にのぼる移住者がシントク原野に入植することもある。基線に沿った現在の本通り周辺は活気を見せ出した。

明治三十五年(一九〇二)になって、新得六号付近に橋井弥兵衛が住民の要望に応じて日用品雑貨の販売店を設けた。これが本町で初めての商店である。

明治三十四年(一九〇一)七月に着手した狩勝トンネルの工事、そして線路の敷設は、地域に大きな影響を及ぼし出した。工事現場の活発化に伴い人の動きも激しくなり、日用品雑貨等の売買・取引も活発になった。しかし、これらの品物は専ら串内を通っての落合方面からの仕入れであり、それほど本町の新得市街まで活況が及ばなかった。

#### 第二章 商業の起こり(P4)

明治三十八年(一九〇五)になって、本通り南一丁目に相馬商店が生活必需品の取扱いをする店を開店した。まもなく橋井商店が並んでその隣に移り構えた。こうして駅前を中心にして、ようやく市街地らしく整っていった。

### 資料その② 目で見る八十年しんとく

#### 「開基八十周年記念写真集一九七九」

(昭和五十四年十二月 発行)

#### 商・工業(P9)

商店の最初は、明三十八年本通南一丁目に店びらきした相馬商店で、まもなく橋井商店も隣に開店した。やがて鉄道が開通すると商店数は

増し、社会的動きとともに商業は進退をくり返してきた。



昭和50年頃の相馬商店

### 資料その③ 新得町百二十年史 上巻(令和二年三月 発行)

#### 第七編 商工・観光

#### 第一章 商工業

#### 第一節 商業のあゆみ

#### 一 商業のあけぼの(P623)

明治期に新得に入植した人たちは、農業を生業としていたため、付近には商店は一軒もなく、マッチや塩をはじめとする日用品は二日ばかりで帯広や芽室まで買いに行かなければならなかった。

一八九九(明治三十二)年八月に、石狩道路と新得八号道路が交わるあたりに官設のパンケシントク駅通所(新得駅通所)が設けられ、旅人や郵便物の継ぎ立てのほか、旅人の宿泊所となり、開拓期で唯一商いの趣を感じられる場所であった。

その後一九〇二(明治三十五)年、字新得基線の六号付近に橋井弥兵衛が、新得町で初めて販売店を設けた。これが新得における商業のさきがけとなった。

一九〇一(明治三十四)年四月、狩勝トンネル工事が始まると、工事に人の出入りが激しくなり、日用品の売買も活発になってきたが、これはもっぱら落合方面から仕入れられたもので、新得市街まではその活況が及ばなかった。

しかし、新得駅開業を前に一九〇六(明治三十九)年、本通り南一丁目に相馬商店が店を開き、まもなく橋井商店がその隣に移ってきて、駅前もようやく市街地らしくなってきた。そして一九〇七(明治四十)年に鉄道が開通し、道央との交通が始まり、鉄道職員などを中心に人口が増加するにつれ、商店の増加も見られるようになった。

以上のように、資料により明治三十八年説と明治三十九年説があります。いずれにしても鉄道駅開業を見越しての開店と思われます。町史の中に次の記載があるので、併せて書き出してみました。

#### 資料その④ 新得町百二十年史 上巻(令和二年三月 発行)

##### 第七編 商工・観光

##### 第一章 商工業

##### 第一節 商業のあゆみ

##### ④ 雑貨店 (P629)

開拓初期の商店は、そのほとんどが雑貨を扱っていた。平野栄次の「明治四十四年から大正四年ころまでと思われる新得市街図」には、本通北二丁目に牧野雑貨、本通り南一丁目に相馬商店の名が見える。相馬商店は新得駅が開業する前年の一九〇六(明治三十九)年、駅前の発展を見越した相馬三郎が本通り南一丁目に開業した荒物雑貨を扱う店であった。酒、たばこ、塩販売の免許を取ったうえ、農産資材まで幅広い商品を取り扱った。荒物とは、ざる、おけ、はたき、ほづきなどの日常使う雑多な品物を指した。

続いて相馬商店の創業者 相馬三郎の渡道と開業に至るいきさつについて書き出してみました。

馬三郎の店)で万丈和尚と相馬三郎の会話の場面で次のように語られている。

〈和尚〉…ところで、相馬殿はどうしてこの店を。〈相馬三郎〉和十郎殿の勧めです。先に弥平殿が雑貨店を開きましたが一軒では品揃えも大変で。何より開拓者の買い物の不便さの解消と、町の発展が期待できると背中を押されました。〈相馬モト〉仕入は帯広まで二日ばかりですけどねえ。今は二軒並んで開拓の便宜を図っておりますよ。〈和尚〉そうですか。ところで相馬殿は高崎の隣町のお人だとか。〈相馬三郎〉左様で。私の家は代々楯岡の神主ですが、幸い私は三男の三郎で自由の身。和十郎殿の開拓の志に感動してこの地にやって来た次第で。〈和尚〉お互いに和十郎殿との縁があったということ…。

※注釈：万丈和尚とは新得寺の初代住職で、三十六歳年上の村山和十郎の強い要請で移住を決意し、明治三十九年三月二十九歳の若さでシントク原野の開拓地に足を踏み入れた。僧侶として、また医者・教師として開拓民を物心両面から支え活躍されたことが伝えられている。

資料その⑥ ひがしね叢書⑪ 「野明け」 著者大江権八 (高崎公民館長) 平成二十七年七月北の風出版より発行

##### 和十郎の死 (P103～P104)

和十郎の生涯の偉業については、色々の資料で周知していたが、和十郎の死について知ったのは、新得寺にある位牌を見せてもらった時のことである。私が初めて新得町を訪れたのは平成三年十月。川久保収入役さんに案内されて新得寺を訪れ、住職太禅さんの厚意によって村山和十郎の位牌のうら側を見せてもらった。そこに「明治四十二

資料その⑤ (原作・大江権八 演出・馬淵正行 脚本・樋口かおり) 平成二十六年十一月八日に新得町公民館で公演された「ここで生きるく北飛翔Ⅱ」の八場(明治四十二年九月十三日・相

年九月十三日、夜九時三十分。相馬三郎宅で脳溢血で倒れる。行年六十九歳」とあった。

相馬三郎とは村山市楯岡の出身で、和十郎の開拓思想に同化されてシントクに移住した友人で、今の相馬治郎商店の先祖に当たる人である。伝えによると、和十郎は人舞村のペケレベツからシントクに住む次男寛一宅にぬた餅を食べに行った帰り、相馬三郎宅に立ち寄り、そこで脳溢血に倒れる突然の死であったという。一説には、寛一宅に至る途中に相馬宅に立ち寄ったともある。なお新得寺は和十郎の招きによって高崎村関山から清野万丈和尚が来住して開基した寺である事は周知の通り。

村山和十郎は明治十七年関山郵便局第二代局長となり、明治三十三年までその職にあった。その関係で同職の道に進んだ相馬三郎とは年齢こそ三十六歳ほど離れてはいたが、二人の友情はとても深かったと思われる。

### 資料その⑦北海開発事績（大正十年九月札幌・地方振興事績調査会発行）

旧仮名遣い・旧漢字・文体も難解なため要約して引用します。

相馬三郎は明治十年九月十日に山形県北村山郡楯岡町に、郷社八幡神社の宮司を務める父・有教の三男として生まれる。山形郵便局電気通信事務養成所に学ぶ。卒業後楯岡郵便電信局に勤務し。六年の間に局長代理に栄進する。明治三十二年仙台郵便電信局に転勤し、書記補を命じられ、電信事業を担当し三年を過ごす。その後、志を北海道の新天地に求め、同郷の先輩村山和十郎氏の住する十勝人舞村に來たり、清水駅通所の経営を委ねられる。この時弱冠二十五歳。のち明治

三十五年人舞郵便局開設時には村山局長の下、局長代理として通信事業章創期の発展に努力した。

明治三十七年辞してニウンナイ未開十町歩の開墾を企画し、更に明治三十九年新得駅建築工事の起工を見ると同時に、荒物雑貨の店舗を開く。当時新得には僅か数戸の商売あるのみ。この間自ら馬を使って帯広に仕入に足を運んだ。また佐幌及び広内にて土地の開墾に着手して、皆これを開墾した。

その後、相馬商店は相馬英三郎（二代目）、相馬治郎（三代目）、相馬邦章（四代目）と事業の商店を承継していった。令和二年六月には中村実希子（邦章の長女）が五代目として事業承継をした。

この間一〇〇年以上に渡り商店を継続できたのは、ひとえに店を盛り立てて下さった多くの町の人々のごひいきの賜物と、改めて感謝申し上げます。